

# 林羅山による山鹿素行への講義について

—— 国文学研究資料館蔵山鹿文庫『大學論語等聞書』を中心として ——

石橋賢太

## 要旨

山鹿素行は、幼いころから林羅山に儒学を学んでいた。そのため、素行の思想形成を知るうえで、羅山からどのような教えを受けたのかを知ることが重要である。しかし、これまではそれを知るための史料がないと思われていたため、十分な研究がされてこなかった。そこで本稿では山鹿文庫所蔵の素行による羅山の講義を書留めたノートである『大學論語等聞書』を用いて、羅山の教えの内容とそれが素行の思想に与えた影響について考察した。『大學論語等聞書』は、『大學』と『論語』との講義筆記であり、素行が十六歳のとき書かれた。羅山が、朱子の『論語集注』に基いて講義をしていたことが見て取れる。また、羅山の講義は広く様々な書物を参考にしている。羅山の講義の中で目立つのは、清原家への批判が多くあることであり、それは従来の権威を打破してあたらしい時代を切り開こうとする意志の表れだと考えられる。素行はそのような羅山の影響を受け、若いころは朱子学への尊信や明代の注釈の活用など羅山の教えに沿った思想を展開していた。だが、やがて素行が独自の思想を確立すると、それらの羅山からの影響は否定されていった。しかし一方で、羅山からの影響が生涯残り続けたと思われる面もある。今後、羅山や素行の思想史的位置を考えるうえでも、『大學論語等聞書』のさらなる研究が必要であろう。



## はじめに

山鹿素行（一六二二～一六八五）は山鹿流を創設した兵学者であるとともに、近世日本における朱子学批判の嚆矢の儒者としても知られている。素行の儒学における師は、林羅山（一五八三～一六五七）である。素行は幼いころから父の方針で学問を学んでいたが、九歳のころに羅山の門に入り、正式に儒学を学びはじめた。この間の事情について、素行の自伝的著作である『配所殘筆』には以下のようにある。

一、九歳の時、稲葉丹後守殿御家來塚田李助我れ等親近付故、我れ等を林道春老の弟子に仕度由頼入れ候。李助次手候て、右の段、丹後守殿へ申上候へば、幼少にて學問仕候事奇特成る由被仰、於御城道春へ直に丹後守殿頼み被下候。就夫、李助拙者を同道仕候て道春へ参り候。道春・永喜一座にて、我れ等に論語の序、無點の唐本にてよませ被申候。我れ等よみ候へば、山谷を取出し候て被為讀候。永喜被申候は、幼少にて如此讀み候事きとくに候、乍然田舎學問の者、師を仕候と相みえ、點惡敷候由被申候。道春も永喜同意に被申候て感悅被仕、別して念比に候て、十一歳迄、以前讀み候書物者共又點を改め、無點の本にて讀み直し候。（『配所殘筆』<sup>1</sup>）

この記述によると、素行は九歳のときに稲葉丹後守やその家臣である塚田李助が仲介役となり、羅山に面会する機会を得た。その場で羅山と永喜（羅山の弟）とに学力を認められて門弟となることを認められた。これは寛永七年（一六三〇）のことであり、このとき羅山は四八歳であった。<sup>2</sup>

引用には永喜がそれまでの素行の師を批判したことが書かれており、たしかに幼少の身で独学であったとは考えにくい、しかしそれ以前に素行に教えを与えた人物についての記録は一切残っておらず、たとえそのような人物がいたとしても、かなり短い期間であったと推測される。そのため、素行が本格的に儒学を学んだのは林家においてであることは間違いない。素行が何歳ごろまで羅山に教えを受けていたのかは明確ではないが、十代の時期は羅山のもとで学んでいたと推測される。寛文五年（一六六五）成立の『山鹿語類』の門人による序には「先生（素行のこと―引用者注）、四書諺解五十餘冊を述す。大概羅山林道春の講意を宗とす」（『山鹿語類』序<sup>(4)</sup>）とある。この「四書諺解」とは現存はしていないが、素行の日記である『年譜』によると一六〇一八歳の期間に著した書だという。<sup>(5)</sup>つまり、すくなくとも十代後半までの素行は、羅山の強い影響下にあったのである。この時期は、堀英雄の区分では素行の生涯における「修学時代」とされ、<sup>(6)</sup>いまだ一家の学を成すには至ってはいない。だが、のちに「古学派」の一人として、伊藤仁斎（一六二七〜一七〇五）・荻生徂徠（一六六六〜一七二八）と並び称されることになる、素行の儒学の基礎は羅山のもとで培われたことは間違いない。したがって、素行の思想形成の過程を知るうえで羅山からどのような教えを受けたのかは非常に重要である。

しかし、これまでは両者に師弟関係があったことがいわれるくらいで、羅山から素行へどのような教えがあったのか具体的に論じられることはほとんどなかった。<sup>(7)</sup>それを窺い知る史料がないと思われていたからである。だが実は、羅山の講義を書留めた素行のノートが残っている。それが山鹿文庫所蔵の『大學論語等聞書』である。これはその題名が示す通り、『大學』『論語』についての講義を筆記したものである。周知のように『大學』と『論語』とはともに朱子学の基本テキストである。「四書」の一篇をなす。したがって、四書の講義は朱子学者羅山の教育の根幹をなすものと考えられ、羅山の教えを知るうえで格好の対象であろう。そこで本稿では同書から見える羅山の講義内容の特色、

及びそれが素行の思想にどのような影響を与えたのかについて考察していくこととする。

## 一、『大學論語等聞書』について

まずは、本稿で取扱う『大學論語等聞書』（以下『聞書』と略記）がどのような書物なのか、収蔵状況や形態などを見ていくことからはじめていく。

本稿冒頭で触れたように、『聞書』は山鹿文庫の中に収められている。山鹿文庫とは、素行の時代から受継がれてきた、山鹿家の蔵書である。現在、同文庫はそのすべてが、素行の子孫の方から東京都立川市の国文学研究資料館に寄贈されている<sup>8)</sup>。山鹿文庫には素行当時からものに加え、のちに素行の子孫などが入手したものも含まれており、その数量は書籍と図版とを合わせ一三〇〇点を超える。中には素行自筆のものもあり、それらの一部は重要文化財の指定を受けている。『聞書』も素行自筆と推定されており、重要文化財指定をされているものの一つである。

なお、重要文化財に指定されていることから分かるように、『聞書』の存在自体は古くから知られており、決して新発見の史料というわけではない。たとえば戦前、国文学研究資料館に移転する以前の山鹿文庫（当時は長崎県の平戸にあり、「素行文庫」と呼ばれていた）を調査した、『山鹿素行全集 思想篇』の編者廣瀬豊は『聞書』について次のように述べている。

「林子」（後述―引用者注）は林羅山で、『大學』『論語』の講義筆記である。故に勿論先生（素行を指す―引用者注）の純粹の著述ではないが、自己の意見を以て要點と思ふ點を筆記した半ば自作の文であるから準著述と見る

このように素行研究の史料としての意義を説いてはいるが、活字化されることもなく、研究の対象となることもほばないまま現在に至っている。

次に『聞書』自体を見ていく。同書は一つの書物と扱われているが、実際には三冊を一つに合本したものである。本稿では便宜上、この三冊を順番に「第一冊」「第二冊」「第三冊」と呼称する。第一冊は『大學』について書かれている。ただし、これは『大學』全編ではなく、朱子による序から伝三章の途中で終わっている。残りの二冊は『論語』について書かれているが、こちらでも一部分しか残されていない。第二冊には表紙があつて、その次々頁の冒頭にまづ学而篇第六章の解説と思われる記述が一行だけあり、その次の行から同第七章の解説がはじまっている。そこから、第二冊では為政篇第六章までが書かれている。第三冊は表紙には「子路 憲問」とあるが、実際に残っているのは子路篇の一部のみとなっている。三冊とも明らかに途中ではじまったり終わったりしているので、素行が若いときに書いたノートを後年になって、おそらくその時点で残存していたものを一つにまとめたのである。ただ、一つにまとめたのが具体的にいつの時期なのかは未詳である。また、当初は『大學』『論語』の現存していない部分に加え、『中庸』『孟子』も含めた四書すべてのノートがあつたとも想像されるが、現在は何も伝わっていないので、こちらも詳細は不明とせざるを得ない。

現在の形態になった経緯は不明確だが、もとのノートが書かれた時期については推定が可能である。第二冊の表紙には「寛永十四」と「林子先生睡意」と書かれている。寛永十四年は西暦一六三七年にあたり、このとき素行は十六歳であつた。「林子」とは当然、羅山のことを指すと思われる。したがって、そのすべてが寛永十四年の一年間に書か

れたものかははっきりしないが、すくなくともその前後の時期に素行が羅山から受けた講義を書留めたものであることはたしかであろう。

なお、素行存命時に、弟子の磯谷義言が素行の蔵書を調査した『積徳堂書籍目録』にも『聞書』のことが記載されているが、そこには「予十二三歳時之れを書す」とあり、三〇四年の開きがある。廣瀬豊は素行の記憶違いであろうとしているが、このあたりも詳細は分からない。<sup>(11)</sup>

次に『聞書』の記述の仕方を見てみよう。文体は片仮名混じりの和漢混交文で書かれている。形式としては、『大學』『論語』の本文は書かれておらず、一部分のみを冒頭に掲げたうえで、その部分についての解説が書かれている。また『聞書』の大きな特徴として、テキストは朱子の『四書集注』（所謂「新注」）に完全に統一されている。『聞書』では経書の本文に先立って注釈の解説がなされ、その注釈を踏まえて本文を理解していくという順序になっているが、その際の注釈はすべて『四書集注』のものである。これは三冊すべてに共通した姿勢であり、『大學』『論語』のどちらもこの形式で貫かれている。このような新注尊重の姿勢は、朱子学の信奉者として知られている羅山の志向を如実に表しているものといえよう。

ここまでは、『聞書』の形式的な特徴である。それでは、その具体的な内容はどのようなものなのか。次節では、実際の『聞書』の記述に即して見ていくこととする。

## 二、講義の性格

まずは『聞書』の実際の記述を見てみよう。ここでは第二冊、『論語』についての講義の最初の部分を掲げる。

好色 尚書ニモ——違難也。朱子女色ヲ好ム人者只ニ無偽上ニハ又ソノヤウニセヌフリヲスル也。

伊川ノ賢々易色也。人者善ク賢人ヲスルト道心ヲ教フ也。

一、翁ノ曰、サハアリサウナレトモ朱子ノハ大学中庸ニアル故也ト言也。

前漢書ハ賢々易(アナドル)色ヲト云。顔師古ガ説也。<sup>(12)</sup>

これは学而篇第七章「子夏曰、賢賢易色」ではじまる章の解説である。朱子の『論語集注』では、この章について「人の賢を賢として其の色を好むの心に易ふるは、善を好み誠有るなり(傍線は引用者による)<sup>(13)</sup>」と注釈している。『聞書』の解説は、この中の傍線を附した部分、「色を好む」(「好色」)についてのものである。

この解説ではじめに目に留まるのが「尚書」の語である。ここでは、『尚書』『書経』の記述を参考として出してきたのである。『聞書』は、このように他の経書を参照することが数多くある。<sup>(14)</sup> また引用の後半部には「前漢書」『漢書』の名が見え、さらに当該箇所顔師古の注釈にも言及している。<sup>(15)</sup>

このように『聞書』は、羅山が全体にわたって広汎な書籍を参照しながら講義をしていたことを物語っている。こういった点は、自他ともに認める読書家たる羅山の面目躍如といえよう。『聞書』中に見える書籍は、その書名が挙がっているものだけでも、四書五経といった儒教の経書だけに限らず多岐にわたる。分野別に列挙すると以下の通りである。なお、書名は原文の表記に従い、必要に応じて括弧内に補足を加えた。

○経書及び関連書

「易」『尚書』「詩」『詩経』「礼記」『礼記』「大学」『大学』「中庸」『中庸』「論語」『論語』「孟子」『孟子』「孝経」『孝経』「古注」『古注』「注疏」『注疏』「大全」『四書大全』「積文」『經典積文』「尔雅」『爾雅』<sup>(16)</sup>



○史書

「史記」「前漢書」「漢書」「後漢書」「通鑑」「資治通鑑」

○諸子百家

「荀子」「六トウ」「六韜」

○文集

「白氏文集」

○唐代儒学

「原道」

○宋代儒学

「太極ノ図説」「太極圖説」「二程全書」「近思録」「朱子大全」

○仏書

「涅槃経」「天台ノ法華」「法華経」か

○和書

「源氏」「源氏物語」

○詳細不明なもの

「来学客書」

書名が挙がっているものだけを取上げても、これだけ多くにわたっていることが分かる。無論、これらの中には『集注』の記述に合わせて見ていかざるを得ないものもあるが（特に四書）、中にはかならずしもそうでないものも含まれ

る。最たる例が『源氏物語』のような和書を例に出すことであろう。当然のことながら、『集注』やその他の宋儒の記述に『源氏物語』が出てくるはずはない。日本のことを例に用いるのは、聴く相手になるべく分かりやすいように講義しようという、羅山の工夫である<sup>(17)</sup>。

また、書名を挙げずに人名のみに言及している例もある。『聞書』に挙がっている人名は以下の通りである。なお、前記の書名から参照していることが明らかかな人物（二程子、朱子など）は、ここには除いている。

「宋ノ河少川」「宋ノ陳道甫」「王陽明」「司馬（司馬光）」「後漢ノカキ（賈逵）」「サセイアン」「明ノ李南黎」「新宇甫」「サセイアン」や「李南黎」などは、どのような人物か未詳である。私が調べて切れないだけかもしれないが、あるいは羅山が講義に際して参照した書物の存在を暗示するものかもしれない。これらは今後の課題とするとともに後学のためにここに掲げておくこととする。

この中で特に注目されるのは、王陽明であろう。『傳習録』などの書名こそ見えないが、羅山が朱子学に基いた講義をするときに、陽明学の存在も視野に入れていたことが見て取れる。

また、書名のとくとく同様に人名でも日本人に触れることがある。その中で特に目に附くのが博士家に対するものである。『聞書』中には博士家の名を出すことが多くあり、しかもその多くが批判の言葉となっている。たとえば、『大學』傳二章の解釈について、次のようにある。

清家ノ点ニハ、自新ノ注ヲミソコナフテ新民（民を新にす）ト本文ヲヨメリ。ソレハアシ、自新トアレハ、新民（新たにす民）トヨムヘシ。<sup>(18)</sup>

ここで羅山は、「清家」すなわち明経道の博士家である清原家の『大學』の訓読の仕方を批判している。これは『大學章句』内の「自新」<sup>(19)</sup>の読み方がただしくないために本文の「親民」の読み方も誤っているとしているのである。それでは、清原家では当該箇所をどのように読んでいるのだろうか。ここでは、清原宣賢の『大學臚塵』を見てみよう。

自ら新にし、民を新にして皆至善に止めんことを欲す。<sup>(20)</sup>

羅山がいつているのはおそらく、朱子の注釈に「自」とあるのだから、「民を新にす」と「民」を新たにすると行う為の対象と見るのではなく、民がみずから新たになると「民」を主語として読むべきだということであろう。たしかに清原家では「民を新にす」と読んでいる。羅山の見解の妥当性はともかくとして、羅山の批判はこのような清原家の理解を踏まえたうえでなされているのである。

武田祐樹は、かつて博士家に学んだ羅山がのちに博士家に強い対抗心を持つてみずからの学問を形成したことを指摘している。<sup>(21)</sup>特に、博士家の新注古注を取り混ぜた経書解釈<sup>(22)</sup>に対し、羅山は批判的だったという。前節で触れたように、『聞書』はテキストを新注に統一しているのも、そのような博士家に対する批判が根底にあったのである。<sup>(23)</sup>先の引用書の一覧には「古注」や「注疏」などが見えるが、それらは新注の比較対象に止まっている。羅山はあくまで意図的に新注を選択しているのである。

つまり、羅山の講義は先行する中世の博士家の議論を意識しつつ、それを乗り越えてあらたな時代を切開こうとするものであったということができよう。また、それに際して広く諸書を参照しており、その中には陽明学のような明代のものや和書なども含まれている。こういった点が『聞書』から見える、羅山の講義の特色である。

### 三、素行への影響（一）——前期の思想との関連

前節までの考察を踏まえ、ここからは羅山の講義が素行に与えた影響について考えていくこととする。まずは『聞書』から時期に近い、三十代までの素行の思想との関連から見ていく。

素行の思想的変遷は、四四歳の『山鹿語類』（特に「聖學篇」）の完成、及びその要約である『聖教要録』の刊行を大きな画期とする。この両書によつて、所謂「朱子学批判」の姿勢を鮮明にしたからである。通常、素行の思想を研究する場合はこの「朱子学批判」の思想を形成して以降の時期を対象とする。本節では素行が独自の思想を現す、この時期に至る前の思想と羅山の講義との関係を考えてみたい。

素行が『山鹿語類』と『聖教要録』とを著すまでにはいくつかの曲折を経ており、一言で表すことは難しい<sup>(24)</sup>。だが、儒学の面では程朱学が中心であったことは疑いがない。たとえば、『配所殘筆』ではみずからの前半生を振り返つて次のようにいう。

學問の筋、古今共に其の品多し。是れに依つて儒佛神道共に各々其の一理有之事に候。我れ等事、幼少より壯年迄、専ら程子・朱子の學筋を勤め、依之其の比我れ等述作の書は、皆程朱の學筋迄に候。〔配所殘筆<sup>(25)</sup>〕

若き素行にとつて儒学とは、取りも直さず程朱学のことであつた。その思想に曲折があるといつても、それは老荘や神道など他の思想の重要性に対する認識に変化があつたのであつて、儒学ではながらく程朱学によつていた。漢唐の

訓誥学や陽明学に心を惹かれたことは、素行の生涯にはほとんどない。

いうまでもなく、このようなあり方には羅山の教えが大きく作用しているよう。そもそも現代においては近世に朱子学が広く行きわたったことはよく知られているが、羅山の当時はかならずしもそうではなかった。すでに触れたように、博士家では古注と新注とを併用しており、また羅山の師にあたる藤原惺窩（一五六一〜一六一九）も『大學』の「親民」を「民に親しむ」と読む<sup>(26)</sup>など、全面的に朱子学に沿っていたわけではない。このような学問状況の中で、羅山は新注のみによる講義を行っていた。しかも、その講義の中では従来の權威であつた博士家を直截批判している。このような講義が、聴く者にあらたな時代の到来を感じさせたであろうことは想像に難くない。素行も、羅山の講義から朱子学こそが儒学の正統であるという認識を得たのだろう。

次に挙げるべきは、羅山が宋以降の書物を積極的に活用している点である。『聞書』の中にも「大全」＝『四書大全』の名が見えているように、羅山は元・明の注釈をよく参照していた。素行もある時期までは、自身の著作で明代の書籍をたびたび引用している。たとえば、三十代（三五歳）に書かれた『修教要録』では「知新日録に曰く<sup>(28)</sup>」という引用がなされている。ここに引かれている「知新日録」とは、『四書知新日録』を指す。『修教要録』には『四書知新日録』の引用が数多く見える。同書は現存していないが、羅山も好んで参照したことが明らかにされている。また、『四書知新日録』以外にも、『修教要録』には明代の書物の引用がいくつかある。朱子学を信奉しているからといって、程朱当時の書物だけを参照するのではなく、その後の中国における経学の進展を踏まえようとする素行の姿勢は、羅山のそれと共通する。もし羅山のもとで学んだのであれば、おそらく素行も明代のものに多く触れることは難しかったのではないか。

ところで、すでに述べたように四十代になって、素行の思想は大きな転回を果たしている。その際、これらの羅山

から受けた影響はどうなったのだろうか。まず、明代の書籍を参考にすることは、ある時期にはつきりとやめている。素行は、そのときのことを次のように述懐する。

寛文の初、我れ等存候は、漢・唐・宋・明の學者の書を見候故、合點不參候哉、直に周公・孔子の書を見申候て、是れを手本に仕候て、學問の筋を正し可申存じ、それより不通に後世の書物をば不用、聖人の書迄を晝夜勘へ候て、初めて聖學の道筋分明に得心仕候て、聖學ののりを定候。(『配所殘筆』<sup>30</sup>)

寛文のはじめごろは、素行が四十代に入った時期でもある。<sup>(31)</sup>素行はこのころに明代のものを含み、漢代以降の中国の書籍を参照することをやめたという。その際に素行の目に映ったのは、元來の儒教から遠ざかってしまった中国儒教の姿だったのだろう。そして、素行が目指したのは、「漢・唐・宋・明」の注釈を捨てて、「周公孔子の書」に回歸することであった。一般には明代の儒学といえば陽明学を指すと考えるが、すでに述べたように素行はその生涯を通じて陽明学に惹かれたことはほとんどない。『修教要録』での参照の仕方などを考えると、ここでいう「明」とは、明代の朱子学系の儒者の注釈書だと考えるべきであろう。これは朱子学を正統と定め、その理解のために元・明の注釈を参考にするという、羅山の方法論の否定を意味することにほかならない。

このように見ると、素行の前半生において羅山の影響はかなり大きかったことが見て取れる。三十代までの素行は、羅山の作り出した方向性に沿って自身の思想を發展させていたのである。その羅山からの教えは、ながらく素行の中で血肉となっていたのであろう。三十代に書かれた『修教要録』が、程朱学を中心として明代の書物を参照しているのは、そのことの表れである。だが、やがて羅山から学んだ方法論は素行の中で違和感を覚えるものになっていった

のであろう。そして、程朱学への尊信や元・明の書物を参照することをやめたとき、素行は独自の思想を形成するに至ったのである。無論、素行の思想的転回は様々な原因が絡み合っているとは思われるが、その過程において羅山の方法論を乗り越えていったということは間違いないと思われる。

#### 四、素行への影響（二）——転回以降の思想との関連

前節では、素行が独自の思想を作り上げる過程で、羅山の方法論を乗り越えようとしていたことを論じた。それでは、羅山から受けた教えは、のちの素行にすべて否定されたのだろうか。おそらく、そうではないだろう。『聞書』に見える羅山の講義には、後々まで素行に受継がれたものもあると思われる。

その一つが和漢の書籍を隔てなく用いることである。素行は若いころから日本の歴史への関心が高く、十代にして神道の伝授も受けている。<sup>(32)</sup> また、早くから和学を学習した集大成として『中朝事實』の著がある。『日本書紀』などに見られる日本の神々の教えと古代儒教とが軌を一にしていることを主張するこの書は、素行が四九歳のときに書かれた。すなわち、素行が独自の思想を形成したあとのものである。日本のことにも言及する姿勢は、素行とおなじように朱子学を批判した仁斎や徂徠には見られない。素行が日本のことにも触れる一因として、『論語』の講義に際して『源氏物語』を例に出す、羅山の教え方があったと見るべきであろう。

第二に、儒学の講義において兵書に言及する点が挙げられる。第二節で見たように、羅山は「六トウ」（『六韜』）について述べている。<sup>(33)</sup> 『六韜』は『孫子』『呉子』などと並んで「武経七書」と呼ばれ、兵学における中心的書物と位置づけられている。もとより儒学を志していた羅山だったが、幕府からの要請により『六韜』『三略』などの兵書の講義

もしていた。<sup>(34)</sup> また『三略諺解』などの著作もあり、羅山は兵書にも通じていたのである。『聞書』で『六韜』に触れているのも、その成果の表れだろう。

一方素行の方は、冒頭でも触れた通り、儒学者であるとともに兵学者でもあった。儒学と兵学とは素行の中ではつねに併存しており、終生それが変わることはなかった。そのような素行のあり方には、儒学の講義に兵学を例に出す、羅山の姿勢が影響したと考えられよう。すくなくとも、儒学と兵学とが対立し合うものでないということを羅山から学んだという可能性はあるのではないか。

第三に、『聞書』を見ていると、羅山の講義には政治にかかわる発言が多いことに気附く。おそらくは幕府に対して朱子学の有用性を主張しようとしたことが背景にあると思われる。たとえば、『論語』学而篇第十二章「有子曰く、禮の用は、和貴しと為す<sup>(35)</sup>」の「禮」について、羅山は次のように説明する。

礼—— ト云、貴賤上下キツカリトシテ、臣ハ君ノソバヘモ不來コソ本ナレ。君臣不知不治。去ハ礼、儀則<sup>(36)</sup>也。

ここで羅山は、「礼」をもつばら身分の上下を厳格化するものとして説いている。これには、江戸期の社会体制と朱子学との親和性を主張しようという意図があったのだろう。無論、「禮」を身分と関連させること自体は決して珍しいことではない。だが、この『論語』学而篇第十二章は『論語』における「禮」の初出なのだが、『集注』の当該箇所において朱子は身分のことには何ら言及していない。ここでことさらに身分のことに言及するのは、羅山の意味の表れだと見るべきであろう。

そして、このような身分制の厳格化を重視することは素行も同様である。素行が「禮」について述べたものを見て



みよう。

竊に惟ふに、禮は上下貴賤の差に因り、以て其の節分を制し、其の分を定むる也。人人分定まれば、情守る所ありて欲自ら度あり。情欲守度あれば、奸邪生ぜず、儉奢其の中を得。『治平要録』卷之五「禮政」<sup>(37)</sup>

素行はその生涯を通じて幕府に仕えることを望んでおり、その思想はつねに為政者としての立場から考えられていた。したがって江戸期の社会体制が素行の視野にはいつも入っており、身分の厳格化も重要なテーマの一つであった。しかも、それは終生変化することはなかった。「禮」は、その身分の厳格化において欠かすことのできないものだとしている。ここで素行が示している「禮」の意味についての認識や、「分を定むる」ものだという説明の仕方が、『聞書』における羅山のそれと似通っていることは、もはや贅言を要せぬだろう。羅山との近似が、素行において自覚的なか無自覚なのかは分からない。だが、すくなくとも羅山の「禮」についての教えが、最後まで素行にとって変更を必要としないものであったことはたしかである。その意味で、羅山から受けた「禮」の考え方は間違いなく素行に受けがれていったのである。

このように見れば羅山の教えの中には、最後まで素行に残存し続けた面もあるのである。前節で見たような朱子学への態度など明確に変化したものもあるが、一方で素行の根幹の部分では羅山からの教えが生き続けた面もあることが、『聞書』からは見て取れる。

## おわりに

ここまで、素行が若いころに羅山から受けた教えについて、山鹿文庫所蔵の『聞書』を手がかりとして考察してきた。最後に本稿の考察の近世思想史における意義について考えてみたい。

本稿冒頭に述べたように、近世思想史における素行の位置付けとしてもっとも重要なのは、朱子学批判の嚆矢という点にある。これは、丸山眞男に代表される近世思想史の見取り図、朱子学↓古学の流れの発端に素行を位置付けるものであった。周知のように、この見解に対して尾藤正英をはじめとする多くの反論があったわけだが、どちらにせよ朱子学の批判者としての素行の扱い自体に違いはなかった。そして、その際に素行の思想と比較される対象となつたのは、朱子を中心とした宋儒の思想であった。

しかし、第三節で見たようにのちの素行において否定されたのは、単に宋儒の思想だけではなかった。そこには、朱子学一尊の考え方とともに明代の注釈の活用も含まれていた。つまり、素行が乗り越えなくてはならないと感じた「朱子学」の中には、明代の注釈から得た像が混入していたと考えられるのである。

ここから考えられるのは、素行の批判の対象となつたとされる「朱子学」とは、はじめの段階ですでに羅山による偏向を受けていたのではないかということである。そうであれば、従来のように素行の思想を宋儒の著作だけと直截比較するだけでは不十分ということになる。素行が克服すべきと考えたのは、実は成立当時の「朱子学」ではなかったのである。

そして羅山及び林家の影響力を考えたとき、このように朱子学の像に偏向がかかったことは、素行一人の問題にと

どまらないとも考えられる。たとえば、素行と同様に朱子学から朱子学批判に転じた徂徠も若いころは林門に学んでいる。<sup>40</sup>近世における朱子学の広がり林家の方法論との関係は、今後検討が必要な問題であろう。

また一方で本稿の考察から明らかになったことは、素行が所謂「朱子学批判」に転じたあとであっても羅山の教えの一部が残存し続けていたということである。これは、羅山から教わった内容のすべてが否定されたわけではないことを意味する。つまり、羅山の教えの中には、のちの素行の志向と合致するものが含まれていたと考えられるのである。だからこそ、それは最後まで素行の中で否定する必要がなかったであろう。もし所謂「朱子学批判」の思想家である素行と朱子学の信奉者である羅山とのあいだに相通ずる要素があるのであれば、朱子学を軸にした単純な対立図式は成立しないことになる。彼らをどう位置付けるか、考え直す必要も生まれるかもしれない。

このような点を考えるうえでも『聞書』は重要な意味を持つ。だが、私の力量不足もあり、本稿では十分な理解までは至れなかった。調べ切れていない点も数多く残されている。さらなる研究をこれからも続けていきたい。

〔付記〕本稿は国文学研究資料館共同研究（若手）「山鹿素行関連文献の基礎的研究」による成果の一部である。

〔注〕

（1）廣瀬豊篇『山鹿素行全集 思想篇』（岩波書店、一九四〇）―以下『全集』と略記―第十二卷、五七一―五七二頁。

（2）羅山の生涯については宇野茂彦『叢書日本の思想家2 林羅山・（附）林鷲峰』（明徳出版社、一九九二）参照。

また、羅山を含む林家の弟子の教育については揖斐高『江戸幕府と儒学者』（中公新書、二〇二四）第八章「林

家塾の教育体制」参照。

(3) 『配所殘筆』の記述では十一歳のときに羅山の授業が終わったかのようにも見えるが、後述のように十六歳のときにも羅山から講義を受けているので実際には二人の師弟関係はその後も続いている。

(4) 『全集』第四卷、七頁。

(5) 『全集』第十五卷、一七〇一八頁。なお、「四書諺解」が現存していないのは明暦三年（一六五七）の大火で焼失したためだという。『年譜』は山鹿文庫本により校合した。

(6) 堀勇雄『人物叢書 山鹿素行』（吉川弘文館、一九五九）三二〇頁。

(7) たとえば中山広司『山鹿素行の研究』（神道史学会、一九八八）では「林羅山のもとで儒学の基礎を固めたことにはまちがひはない」（二五頁）と述べているが、具体的に何を教わったのかについては言及されていない。

(8) 山鹿文庫については、中嶋英介『山鹿素行全集 思想篇』考」（『国文学研究資料館紀要』第四三号 文学研究篇、二〇一七）参照。

(9) 『山鹿素行全集 月報』第六號（一九四一）一頁。なお、「遺著解題」とは『全集』に収録できなかった、素行の著作に対する解題である。

(10) 『全集』第十五卷、八九三頁。なお、『積徳堂書籍目録』は山鹿文庫本により校合した。

(11) 注（8）の廣瀬による「遺著解題」

(12) 二七丁表。なお原文には返り点や送り仮名が附されているが、引用ではそれらは省略した。必要に応じて括弧内に読み方を補った。また、句読点は私に補った。以下、『聞書』の引用はすべて同。

(13) 「賢人之賢而易其好色之心、好善有誠」

- (14) なお、『尚書』には「好色」の語はなく、羅山が具体的にどの箇所のことをいつているのかは不明。
- (15) この部分は『漢書』眭弘傳にある。「聖人承天、賢賢易色、取法於此」また顔師古の注は「師古曰、賢賢、尊上賢人。易色、輕略於色、不貴之也。易七二反」
- (16) なお、『春秋』や三伝は書名こそ見えないが、「吳季子」に言及している箇所があり、これは『春秋公羊傳』襄公二五年にあるので、『春秋』も参照していることは間違いない。
- (17) また『論語』為政篇第五章の解説では「日本ハ牛ガ車ヲヒク也。唐ニハ午ガヒク也」（五〇丁裏）と日本のことと比較しながら説明している。
- (18) 二一丁表。
- (19) 「鼓之舞之之謂作、言振起其自新之民也」
- (20) 『大學聽塵』の引用は大島晃他編『清原宣賢漢籍抄翻印叢刊 1 大学聽塵翻印之部』（汲古書院、二〇一一）によった。同書七四頁。
- (21) 武田祐樹「古典を読むという行為の一展開―抄物と諺解の比較検討を通じて―」（『日本漢文学研究』一〇、二〇一五）
- (22) 清原家の経書解釈については水上雅晴「清原家の『論語』解釋―清原宣賢を中心に―」（『北海道大学文学研究科紀要』二〇〇八）、「清原家《論語》抄物における経説―清原宣賢《論語聽塵》を中心として―」（『言語文化論叢』第十一号、二〇一四）参照。
- (23) しかし、一方では博士家から学んだものも羅山の中で生きていたとも思われる。たとえば、先の『聞書』に見える書名の中には仏書も含まれていたが、清原家の抄物には仏教を引合いに出すことがあるのである。『大学

聴塵』は「至善」について「佛教ニ合テ云ハ、譬ハ、妙覚如來也」(『大学聴塵翻印之部』 五一頁)と説明している。『本朝神社考』などで仏教排斥の姿勢を明確にしている羅山が、四書の講義に際して仏書に言及するのは、博士家に受けた講義の影響が残っていたのだろう。

(24) 堀前掲書参照。

(25) 『全集』第十二卷、五九三頁。

(26) 「在親民トハ、民ハ士・農・工・商ノ四民ノ四業也。親ト云字ニ、親愛養育の心アリ」(『大学要略』上、『日本思想大系 藤原惺窩・林羅山』岩波書店、一九七五、四二頁)

(27) 大島晃『日本漢学試論―林羅山の儒学』(汲古書院、二〇一七) 参照。

(28) 『全集』第二卷、七八頁。

(29) 大島前掲書参照。

(30) 『全集』第十二卷、五九五頁。

(31) 三十代後半からの数年間は、素行の人生における「動揺期」といわれる。この時期の素行の思想については佐久間正『徳川日本の思想形成と儒教』(ベリかん社、二〇〇七) 参照。

(32) 「一、一七歳之冬、高野按察院光宥法印より神道令伝授候。神代之巻は不及申、神道之秘傳不殘令伝授候。其後壮年之比、廣田坦斎と申候忌部氏之嫡流之者有之、根本宗源之神道令伝授候。其節、忌部神道之口訣、不殘相傳候書付証文を越候」(『配所殘筆』、『全集』第十二卷、五七三頁)。

(33) なお、『聞書』で挙がっている箇所は、『六韜』文師篇「太公曰、縉微餌明、小魚食之。縉綱餌香、中魚食之。縉隆餌豊、大魚食之」

- (34) 宇野前掲書参照。
- (35) 「有子曰、禮之用、和為貴」
- (36) 三五丁裏～三六丁表。
- (37) 『全集』第十四卷、六九六頁。
- (38) 『日本政治思想史研究』（東京大学出版会、一九五二）
- (39) 『日本封建思想史研究』（青木書店、一九六二）。また同氏の素行の研究として「山鹿素行の思想的転回（上）（下）」（『思想』五六〇・五六一号、岩波書店、一九七二）
- (40) 宇野茂彦「文化史上の林羅山の価値」『新しい漢字漢文教育』第六六号、二〇二八）参照。

Lectures given by Hayashi Razan to Yamaga Sokō  
mainly described in *Daigaku-Rongo-Tō-Kikigaki* in the  
Yamaga Book Collection owned by the National Institute of  
Japanese Literature

ISHIBASHI, KENTA

Yamaga Sokō studied Confucianism under Hayashi Razan since his young age. In order to know Sokō's thought formation, it is important to know what kind of teaching Sokō received from Razan. However, sufficient research has not been done so far because it was thought that there was no historical material for investigate. In this article, by using the notes written down by Sokō on lectures given by Razan, *Daigaku-rongo-tō-kikigaki* held in the Yamaga book collection, we examined the contents of Razan's teaching and how the teaching influenced Sokō's thought. The *Daigaku-rongo-tō-kikigaki* was a lecture note on both the *Daxue* (The Great Learning) and the *Lunyu* (the Analects). Sokō wrote this lecture note when he was sixteen. This lecture note tells us that Razan was giving a lecture based on Zhu Xi's *Lunyu-jizhu* (Collected comments on the Analects). Razan's lectures also widely refers to various books. Criticisms toward the Kiyohara family appeared noticeably in his lectures who can be interpreted as his manifestation of the intention to breach the conventional authority and to open up a new era. Being influenced by such Razan, when he was young, Sokō had developed thought in line with Razan's teachings such as reverence for the Zhu Xi school and his use of commentaries of the Ming dynasty. However, as Sokō eventually forming his own ideas, the influence from Razan was gradually denied. However, there are also some aspects which suggest that Razan's influence had remained for the rest of Sokō's life. In order to understand the positions of Razan and Sokō in the history of ideas, further research on the *Daigaku-rongo-tō-kikigaki* will be necessary.